

熱川温泉病院 小暮 優奈(相談員)

功 績	不穏がある患者さんを見守り、寄り添うことで心の落ち着きをもたらした結果、希望する自宅退院を実現させた功績。
推 薦 者	坂田 友和(医療連携室 室長)
推 薦 理 由	小暮は今回、対応が難しい患者さんを粘り強く見守り、寄り添うことで、希望する自宅退院を実現させました。これは、理事長が紹介された『心の処方箋』“相談員は患者さんの人生設計に携わる”を文字通り実践したものと思います。相談員になってまだ日は浅いですが、積極的に業務に取り組んでいるおかげで、患者さんやご家族は勿論、私たち職員にとっても頼りがいのある存在となっています。今後の更なる成長も期待しておりますので、是非理事長賞にご推薦申し上げます。

内 容

入職5年目の小暮はもともと医療連携室の営業担当で、神奈川県内の医療機関を訪問して当院への転院のご相談を承っておりましたが、新型コロナウイルスの影響による移動の自粛もあって、今年の6月から院内の相談員として4階病棟及び6階病棟を担当しております。彼女は持ち前の明るい性格と責任感ある仕事ぶりで、当院と患者さんやご家族とのパイプ役として欠かせない存在となっております。

今年7月に6階病棟に転院されたAさんは、脳梗塞の後遺症のため不穏や感情失禁がありました。検査や診療を拒否し、「いいんです!」「ほっといて下さい!」と正面玄関の扉を叩きながら大声で不満を表し、離院しようとするのを病院スタッフが必死に制止するケースが頻繁に生じていました。自宅退院を希望しながらも、冷静な会話もできず、状況が改善することはありませんでした。

患者さんの尊厳を重んじる健育会では身体抑制は出来る限り行いません。小暮は医師・看護・リハビリと連携しながら対策を練り、ご本人の希望を聞きながら落ち着くまで見守りを継続することにしました。Aさんが買い物に出たいときは、コンビニエンスストアまでの往復2.0kmを「今日は暑いですね」「いつも元気ですね」と会話しながら一緒に歩きました。また別の日に外出した時は、Aさんが納得するまで7時間も傍を離れず見守り続けました。

小暮を始めとしたスタッフの粘り強い対応のおかげで、9月になると徐々に落ち着いてきました。最初の頃の陰い表情が、穏やかになり不穏行動も減少しました。そして10月末になり症状も安定し、関東にある自宅の受け入れの準備ができたのを確認してから退院となりました。小暮は今でもAさんやご家族と連絡をとっておりますが、電話越しに穏やかな様子で時々笑い声も聞こえてくるので安心したそうです。